

行成と実方（説話集）

十訓抄

大納言 行成 卿、いまだ 殿上人 にて おはし ける とき、実方 の 中将、
大納言藤原行成卿が、まだ 殿上人 で いらつしやったとき、 藤原実方の 中將が

形動・ナリ・連体 係助・疑問 過原推・けむ・連体（結び） 謙（作者↓実方⇨行成）
いかなる 憤り か けん、 殿上 に 参り合ひ て、
どのような 憤り があつたのだろうか、 殿上の間に参上して、 行成と出くわし、

言ふ こと も なく、
言葉を発することなく、

行成 の 冠 を 打ち落として、 小庭 に 投げ捨て て けり。
行成の 冠を 打ち落として、 小庭に 投げ捨てて しまった。

行成 少しも 騒が ず して、主殿司 を 召し して、

「冠 取り て 参れ。」とて、冠 して、

守刀 より 筭 抜き出だして、鬢 かいつくろひ て、居直り て、

「いかなる こと にて 候ふ や らん。

たちまちに かう ほどの 乱罰 に

あづかるべきことこそ、おぼえ侍らね。

そのゆゑを承りて、のちのことにや侍るべからん。」と、

ことうるはしく言はれけり。

実方はしらけて、逃げにけり。

折しも、小蒨より主上御覧じて、

「行成はいみじき者なり。

かくおとなしき心あらんとこそ思はざりしか。」とて、

そのたび蔵人頭空きけるに、多くの人を越えて、なされにけり。

実方をば、中將を召して、「歌枕見て参れ。」とて、

陸奥守になしてぞつかはされける。

やがてかしこにて失せにけり。

。

実方、蔵人頭にならでやみにけるを恨みて、

、

執とまりて、雀になりて、

殿上の小台盤にゐて、台盤を食ひけるよし、人言ひけり。

一人は忍に耐へざるによりて前途を失ひ、

一人は忍を信ずるによりて褒美にあへるたとなり。